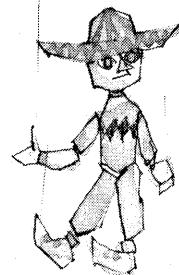


# 幼児の観察研究——靴と幼児



津 守 真

子どもがしたり、いたりすることを、客観的な行動面だけで受けとのでは、そこで起こっていることをとらえるのに十分でないことを前回に述べた。行動は、子どもの側に起こっていることの表現である。おとな目の前には、未知なる子どもの世界が大きく口を開いて横たわっている。行動は、その世界がわれわれの目に映るような形であらわれたものである。おとなは、それを媒介として子どもの世界にふれるのであるが、客観的な行動の断片を寄せ集めて再構成しても、もとの形にはならない。そこで起こつていることの中心をなす重要な部分は、人が「感じる」ことによつて伝わる。ある場面に立ち会つて、人がある感動をうけるとき、その感動を中心にしてその場面は成り立つてゐる。人が自分の立場や知識にとらわれず、素直な心の状態で場面に立ち会うとき、そこで起こつていることの本質的

なことのある側面がその人の心に伝わつてくる。それは、その人の意志や意図によるのではなく、向う側によつて動かされるのである。「感じる」とか「感動する」とかいうのは、感じさせられ、感動させられるのである。観察においては、このことを無視することはできない。保育者としては、子どもにふれる場合にも、保育者の立場を離れて見ることのできる場合にも、生きた子どもの生活がそこにあるときには、迫力をもつてせまつてくるものを感じることができるであろう。それが何であるかを自分自身に明らかにするには、時間がかかる。しかし、子どもにふれるものにとっては、いたるところ、このような場面に満ちている。

前回に、たまたま、シンデレラごっこの中の靴の場面について記した。時計が十二時を打つて、シンデレラが急いで帰る途中、靴がぬげるところになると、子どもたちはシ

ンデレラにとびかかつて片方の靴をぬがせる。それから、みんなで大きわきして、いろいろの子どもに靴をはかせてみる。私はそこに立ち会つて、靴に示される子どもたちのもり上がつた関心を見いだして驚き、靴とは子どもにとつて何であろうかと不思議に思った。子どもの観察も保育も、私たちが出会つたところが出発点になる。始まりも終りも絶対的なものではない。どこからでも始まるし、これですべてをなし終えたという線があるのでもない。観察することができるのである。また、説明するのにはもつと他のよい例がありうる。たまたま、前回に、このシンデレラの靴の場面から始めたので、このことから考察を進めることにする。

### 子どもの観察例から考える

シンデレラの靴をみんなでぬがせて、その靴の合う人をさがす場面には何か人をひきつけるものがあることを、私はその場に感じた。子どもたちはその靴に特別の関心をもつている。その関心はどのような性質のものであるのか、子どもにとって靴とはどのような意味をもつものであるか。

靴を主題とする子どもの行動場面で、すぐに思い浮かべ

られる場面がその他にもいくつもある。それにも共通のが見いだせないであろうか。次にいくつかあげてみる。

●歩き始めのころ、一歳半か、二歳くらいの子どもは、縁側からすべりおりて、はだしで地面の上を歩いて、外に出て行く。外に行くのに、その子にとって靴は関係がない。

内と外との空間の性質の違いはあるが、靴をはくかはかないかを区別する仕切りはない。親はそのあとを追いかけて靴をはかせ、雑巾をもちまわつて足をふく。子どもは、いつのまにか、すっと出て行き、すっと入つてくる。その場にふれて感じられるものは、子どもが外に出て行こうとする外向きの意欲である。外に行こうとする意欲の前に、靴は姿を消してしまう。母親が追いかけてはかすとき、靴は社会的のわくを代表するものとなる。

●私の子どもが、はさまを使い始めたとき、一番最初に切り抜いたのは、靴の広告であった。(二歳ころ)姉がはいているのと同じ赤色の運動靴で、おひめさまのえがついている。まわりを大ざっぱに切つて、持ち歩いている。大きい姉と同じようなものを持ちたい、姉と同じようになりたいというような気持ちが、その靴の切り抜きに感じられる。

●付属幼稚園の砂場に、子どもは、はだしになつてはいる。

り、水を流している場面が、数年前よりしばしば見られる。素足の感じをしたのしんでいるように見える。私は少年のころ、海辺をはだしで歩き、砂浜をはだしで走った感覚を思いい起す。幼稚園で、靴をはいて砂場に入っているときよりも、一層いきいきした姿を感じる。

●保育室から庭に出る時、庭から保育室にはいるとき、子どもたちは背をかがめて、靴をはきかえている。その姿は、いく百たびとなく目に映っている。子どもたちは、幼稚園にきたとき靴をはきかえ、保育室から庭に出るとき靴をはきかえる。

●Kは、親が靴をはかせようとすると、靴をふりすてて、かけ出して庭に行く。その靴を水たまりの中につける。その靴をさくの外に投げする。おとなのはいている靴やサンダルをぬがせて、さくの外に捨てたり、水たまりにつけたりする。親は、Kが靴をぬいでいるのを見るたびに、靴のこと注意をする。Kは靴を社会の常識の代表としてみてそれに抵抗している。

靴というときに、すぐに目に浮かぶ靴と子どもの光景をあげるだけでも、いくつも並べることができる。まだいくつもあるが、いまは言外におくことにする。

### おとなとしての体験から考える

おとなとしての自分自身についても、靴を主題とする場面は、いくつも思い浮かべられる。子どもの体験を間接に

感じとも、自分の体験はもつと直接に感じられる。

●日常、外に出るとき靴をはく。あるいは、下駄やサンダルをはく。何かをはかないで外に出ることはめったない。庭いじりをするとき、海岸に遊びにいったときなどである。そのときはだしの感触を思いい起すことができるのである。快い新鮮な感じである。子どもが外にはだしで出たときには、自分もはだしになつて出てみると、他人から見られていないかという後めたきと共に、開放感がある。土に足がふれる快感のみでなく、外をはだしで歩けるという開放感、社会の束縛をはなれた開放感である。自然と一体となる感じであるのに対し、靴をはいて歩くというのは、自然から一歩離れることであるのを感じる。

### 靴と素足

●日常、外に出るとき、黒の革靴をはく、たまに、簡便な運動靴で街路を歩くと、学校に行くときと同じ路を歩いて、家の周囲を気楽に歩きまわる感じである。家の中に

いるときの自分自身の感じを保っている。

おろしててのいい靴をはくと、気分も新鮮になる。女の人の靴は、いろいろのスタイルがあるから、靴の違いによる自分の感じの変化も、多分、多様であろう。

### 靴の種類

- 大勢の人が靴をぬいで上がる集会にいったとき、同じような靴がたくさん並んでいて、自分の靴を間違えることはほとんどない。黒の革靴は、似たようのがたくさん並んでいるにもかかわらず、すぐに自分のとわかる。自分の靴がわかるというのは、形体や色だけによるのではなさそうである。

自分のではない靴をはいたときには、見ないでも、はき心地ですぐにわかる。自分の靴を見失ったときには、とても困った感じを体験する。それは帽子や外套を見失ったとき以上の困惑である。帰れなくなってしまったというような感じである。私は夢の中で、靴が片方なくなつた夢を見たことがある。また、靴が破れて、靴屋をさがしてまわつた夢を見たことがある。それは困惑した感じを伴つてゐる。靴は自分自身の一部分にくみこまれているようである。

- 日本では、外に出るときに、靴や下駄をはくが、室内

では靴をはかない。室内も、日本間ではスリッパをはかない。応接間にはスリッパをおく。便所には便所用のスリッパをおく。台所には、台所用のスリッパをおく。部屋の性質により、異なつた種類のスリッパをおく。スリッパの有無、性質は、部屋の空間の性質を代表するといえよう。

### 空間の性質

#### 光景について

あるひとつの体験を思い起こすとき、その中での特定の時と場所の光景を思い浮かべていることがしばしばある。

ここにもすでにいくつかのべたし、また、後に述べるものも同様である。詳しくいうならば、その前後に多数のできごとや経過があるにもかかわらず、すべてがそのひとつの場面の光景に集約されているともいえる。そのひとつの光景が自分で選択されて出てくるには、その体験の全体の中で、自分が本質的と感じているものが自ら動いて形をつくる力を考へねばならぬ。あるひとつの光景を思い起している人にとっては、だれでもがその同じ場面を印象深く思い起こしていると思い、そのことを疑わないかもしれない。しかし、それは、その人の全体験の中から、その人にとって意味をもつて浮かび上がってきたことである。

### 自分の靴

体験は、生命過程そのものを、人の側からとらえたものである。とらえるというのは、すべて意識したこととはかぎらない。体験の中には、その人に気付かれていないものが多くある。本質をなすものは、一瞬の中に感じとられることが可能であるが、それが意識の面に分析されて確認されるには、時間と精神力を必要とする。その前に、本質的なものは、自ら動いて形を作る力によって、ひとつの光景、あるいは風景となってあらわれるるのである。夢も、この意味での光景のひとつであるし、自然の風景も、人の精神とのかかわりなくしては考えられない。できごとの中にあらわれる光景もまた同様である。

ここで述べたことを逆にいうと、自ら浮かび上がつてきた光景はその人の体験に本質的なことをふくんでおり、そのことを手がかりとして考へることにより、人間の本質的なことあるいは原型にいきあたることができるのだということである。ただし、人がある時点できあたりうることは、あるところまでである。急いであせつても、どうにもならないものがある。そのことは、時間をかけていくなくならば、ある限界内でどこまでも深く下がっていくこともできるということを示すものである。

私は、靴のことを考へ始めたとき、靴屋の店先に立つてしばらくの時間を過ごした。第一回のときは、デパートの中の小さな靴屋だったが、人の足から独立して、だれにも属さない靴だけがたくさん並んでいることに、ふだんは靴に対して感じない異様さを感じた。それは、集会所の玄関にたくさん脱いで並べられた靴の群とは異なった感じである。下足箱に並んだ靴とも違う。また、靴はすべて二つで一対をなしていることに目がひかれた。

第二回目は、銀座の靴専門店のいろいろの靴の棚の前に立つた。そこは大きな靴屋なので、だれにもいぶかられないに立つていられるので工合がよかつた。そこで、私は、上等な黒の紳士靴の並ぶ棚の前で、立ち去ることができない感動を覚えた。それは、突如として、私を襲った。上等な紳士靴は男性の象徴であるという感じと重なってあらわれたのは、米国にいる私の親しい友人たちである。二十年前に、それぞれの家庭で知り合い、昨年久しぶりに再会した人たち、私よりも年長で、中年から老年に属する人たち、N氏、T氏、D氏、W氏、B氏、M氏、R氏……記していくと多くある。欧米人は家の中でも靴をはいている。靴は

### 自分自身の体験から考へる——靴屋の店先

その人のにおいと風貌を伝える。靴を通して、その人たち

の威儀と教養と友情が伝わる。立派な紳士靴は、はくためのものというより、西欧人にとっては、男性の一部である。

それから、婦人靴、イーブニングを着たときの白い靴、それからオーソドックスな黒いハイヒール、それも、ひとりひとりの米国の女性を思い起させる。主に、中年から老年の女性で、さきに名を挙げた家の主婦である。その靴とともに、それらの婦人たちの人柄が浮び上がる。

靴屋の他の靴棚には、珍奇な色や形の靴が多く並び、若い人たちが人だかりしていたが、私にはほとんど感興を起させなかつた。

### 靴にみられる文化と社会

日本では、家の中では靴はかない。靴は外に行くときにだけはく。汚い外、社会の眼にみちた外では、靴をはくことが要求される。戸外で靴をはくことは社会の常識である。

そのことは、西欧と対照的である。西欧では、家の内でも靴をはく。昨年、久しぶりで米国に行き、親しい家の居間に靴のままで入り、靴でじゅうたんを踏み、そこで歓談した。その光景が、靴とともに私の中に思い浮かぶ。靴のま

まで家に入った瞬間、私は西洋に来たことを感じた。西欧人にとっては、靴は洋服と同じように、いつでも人が身につけているものである。靴は、人格の一部をなしているともいえるし、その人のもつ文化の一部でもある。英文学のT教授を囲んで話したとき、西欧では、昔から、靴は身につける大切なものだったから、外を歩くときに昔は、上等な靴は、内ポケットにいたとすることを聞いたことが思いい起される。

日本では、清潔にしてある家の内から、外の汚いところに出るときに、靴を足にひつかけて出る。外を歩いて汚れた靴のまま家の内に入ることは、社会の常識として許されない。家の外に出るときには、靴や下駄をはくのも社会の常識である。

西欧においては、靴は人の一部でもあり、人のもつ教養や文化を象徴するものもある。靴の相異が教養や文化の高い低いをあらわすということではない。靴そのものが文化の中に入りこんでいるということである。日本における靴は、人の外側からの社会の規制を代表するものであり、靴のおしゃれも、外に対する見栄としてのアクセサリーの意味合いが強いといえよう。

- 歩き始めたころ、はだしで戸外に出ていった子どもの

あとを親は追いかけて、靴をはかそとする。ある場合に  
は、かなり強制的に、ある場合には、子どもの選択にまか  
せて。庭だったらはだしで歩かせておきやすい。門を出で  
おつかいに行くときには、靴をはくことを強く要求する。  
子どもは、あるときは、靴をはくこと自体にたのしみを  
見いだす。またあるときは、靴をはくことが社会的に強制  
される。また、家に入るときに靴をはいていると、ぬぎな  
さいといわれる。その強制は日本では絶対的であり、外を  
靴で歩くよりもっと強い要請である。西欧人の場合には、  
この点は全く異なる。一度はいた靴は、家の外でもはきつ  
づける。日本の場合には、靴は、内と外とを区別するもの  
であり、靴は外の汚いところを歩くためのものである。靴  
をはいてさえいれば、それが自分のであろうと、他人ので  
あろうとかまわない。西欧人の場合は、一度はいた靴は、  
自分の靴であり、自分の足もある。

● シンデレラの物語の中で、シンデレラの靴が片方ぬげ  
て、あとに残されるとき、その靴には、その人の体臭が残  
っている。靴はその人の一部である。その靴が合う人をさ  
がすというのは、寸法や形の適合性だけのことではない。  
人そのものをさがすのである。その靴をはいていた人格そ  
のものをさがすのである。西欧における靴の意味を考え

きて、そのことはかなり明瞭にいえると思う。  
日本の子どもがシンデレラの劇をあそびながら、靴の場  
面に大きな関心をもつ。日本の子どもにとつて靴のもつ意  
味もそれなりに大きく、その生育過程では靴をめぐってさ  
まざまの体験をしてきてるので、ここでもシンデレラの  
靴に关心を示すのはむしろ当然である。同時に、子どもた  
ちは西洋の物語の中にこめられている靴のもつ意味を、こ  
の劇あそびを通して、体験しているともいえるであろう。  
物語による体験と実際の体験との相異については、さらに  
考察を加える必要がある。

● 現代の日本の子どもの靴には、運動靴が多い。ゴムと  
ズックでできており、最も安価で簡便である。汚れたり小  
さくなれば、どんどん捨てる。だれのでもかまわずにか  
せることもある。便利である。しかし、そこに、現代の日  
本人の靴に対する感覚の特殊性があるのでないだろうか。  
内と外の区別をする役を果たしさえすれば、できるだけ安  
くて便利なものを子どもに与えておけばよいということ。  
日本のはきものには、下駄もあり、草履もある。革靴を  
はくようになったのは明治以来のことであろう。下駄や草  
履は、日本人にとって、靴とは違った意味をもつてゐるの  
であろうか。日本人にとってはきもののもつ積極的な意味

を考えるには、もっと別の観察をつまねばならぬ。他方現

代の子どもは、はなおの下駄をはけなくなつてきている。

下駄や草履よりも、ビニールのサンダルを好む。日本の子どもが、昔ながらの下駄をはけなくなつてきているということは、日本人としての感覚を失いつつあることにはならないだろうか。はきものだけのことならそれでもよいのかかもしれない。しかし、革靴、運動靴、下駄、サンダル、草履など、現代の日本人のはきものは、他の国に見られないほど多様でありながら、社会の常識にかなつて、安価で便利で、見たところがきれいならよいという性質が強い。その性質は、日常生活や、教養のすべての面についてもいえるのではないかと思う。子どもの教育についても、文化の質は問題にされず、現在の社会生活の表層にあわせてしか考えられていないことが多いのではないか。

シンデレラの靴から始まり、その他、靴を主題とする子どもの行動場面について、そこで感じとられることを中心として、それは何であるのかを考えようとした。靴についての観察例はまだ多くあり、そのあるものはここに述べたものとは異なる性質のものである。考察すべき残された材料は数多くある。

ここにみた限られた材料の中から、子どもにとり、靴とは何であるかをもう一度考えてみると、靴は、社会または文化と関連が深いよう思う。シンデレラの靴は、シンデレラという人間の一部をなしており、落とした靴は、舞踏会にいくための特別たいせつな靴である。靴が特定の人を代表するということは、その人のもつ教養や文化をふくめて全人格を代表するということである。私がここでいう文化とか教養とかいうことは、人がいきいきと生きていく生活の中から生まれてくるその人の人間らしい精神というようなものである。知識や才能のみに限らない。後になるとそれと関連が出てくるが、その根底となるようなものである。英語では、教養も文化も、カルチャー Culture であり、土を耕すことを意味する。耕した土の中からこそ芽が出てくる。すなわち、生命過程の中からそれを養い育てることによって生まれ出る人間の精神が文化である。シンデレラの生活の中には、子どもがひきつけられる人間性がある。子どもたちはそのシンデレラに愛着をもち、シンデレラの靴は、その全人格を象徴するのである。

社会もまた、本来、人が他人に対し示す関心のひろがりであり、生きた人間の人格と切り離すことはできない。しかし、しばしば、社会の規制や常識の面のみが切り離さ

れて、人に強く意識される。日本の子どもにとつて、靴は、しばしば、その面での社会を代表するものとなる。ゆえに、靴というと生活習慣のことしか思い浮かべない考え方が出てくるのである。

たまたま靴の観察から始めたのであるが、そこから始めて、ならばならぬ理由があつてそうしたのではない。保育者として、また、第三者として子どもにふれるところには、どこにでも、子どもの世界が開かれている。その直接の経験を手がかりにして、それは何であるかと探っていくところに、子どもの世界の理解ができるいく、素材は無限に近く、われわれの理解はまだ表層にとどまっている。

子どもと靴という小さな一つの場面をとり上げてみても、子どもにとり、靴はさまざまな感じ方をもつて体験されたりすることを述べようとした。私はこのことを保育研究会で話したところ、そこにいる人々の靴の体験の中の光景がいくつもたちまち提出された。そして、幼稚園で生活習慣の問題というとかならず靴のことが出てくることが何人もの人から語られた。靴をひとつとってもなお多くの課題が残されている。私共はその門口に立つただけである。

(つづく)

幼児の教育 第七十二巻 第三号

三月号 定価一〇〇円

昭和四十八年二月二十五日印刷  
昭和四十八年三月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼  
発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレー贝尔館  
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします